

## 蒋介石の革命理念と日中戦争

慶應義塾大学 段 瑞聡

20世紀は革命と戦争の世紀である。これまで、日中戦争に関する研究は数え切れないほど多い。しかし、中国革命と日中戦争との関係という視点からの分析は、管見の限り、ほとんどない。それは、中国共産党の「革命史観」に対する反動であり、あるいは「民国史観」の影響があるからかもしれない。そのような状況を鑑み、本報告ではあえて「革命史観」で日中戦争をとらえなおしてみたい。具体的には蒋介石の革命理念と日中戦争との関係について検討を加えてみたい。

中国革命の対象として、対外的には帝国主義の打倒、不平等条約の撤廃、失地の回復、および弱小民族の独立の支援であり、対内的には軍閥の打倒と国家の統一である。蒋介石の革命理念においては、反共の要素が含まれていることは言うまでもない。また、『蒋介石日記』を通読すると、彼の革命の対象の変化がよく分かる。その大きな転換点になったのは、1928年5月に発生した済南事件である。それまで、蒋介石はイギリスを革命の対象としていたが、済南事件以降、彼は日本を革命の対象とするようになった。

蒋介石にとっては、日中戦争は彼が率いる第二期国民革命において発生したものであり、極めて不本意な戦争であったと考えられる。なぜなら、蒋介石はあくまでもソ連を最大の敵と認識していたためである。

蒋介石は反帝国主義者でありながら、帝国（米英ソ）に依存せざるを得なかった。そこからは、彼の革命理念のジレンマが見て取れるのである。

【附記 本研究は、慶應義塾学事振興資金の助成による成果の一部である。記して感謝申し上げたい。】